

'The world she wanted'
by Philip K. Dick from Science Fiction quarterly, 1953.5

新訳

彼女が望んだ世界

フィリップ・K・ディック
大森 望 訳

イラストレーション= fancomi

本作は彼の作家活動初期の1953年にアメリカのSF雑誌に
掲載され、現在も日本では単行本に収められていない貴重な作品である。
数々のディック作品の翻訳を手がけてきた大森望による新訳でお届けする。



目の前のテーブルには、煙草の吸い殻やビールの空き瓶や使用済みの紙マッチが散らかっている。ラリー・ブルースターは眠い目でそれを眺め、ビール瓶一本の位置を直した——よし、これで完璧だ。

〈ワインドアップ〉の奥では、少人数編成のバンドがディキシーランド・ジャズをにぎやかに演奏している。耳ざわりなジャズのサウンドが、薄暗いフロアに響く客の話し声や、カウンターでグラスが触れ合う音と混じり合う。ラリー・ブルースターは楽しい満足の吐息を漏らした。

「これが涅槃^{ねはん}ってやつか」と言ってから、自分の言葉に自分で相槌を打つようにゆっくりうなずいた。「すくなくとも、禪の天国の第七層」

「禪の天国に第七層なんてないわ」どこか上のほうから、有能そうな女性の声が訂正した。

「たしかに、事実はそうかもしれない」ラリーは認めた。「でも、ぼくが言ったのはものの喩^{たと}えだ。文字どおりの意味じゃなくて」

「もっと言葉に気をつけたほうがいいわね。口にしたとおりのことを、心で思っているべきよ」

「それに、心で思うとおりのことを口にすべきだと？」ラリーは相手をじつと見上げて、「どこかで会ったことがあったっけ、お嬢さん？」

スレンダーな体つきをした、金髪の若い女性が、テーブルの向かい側の席に腰を下ろした。バーの薄暗がりのおかげで、彼女の瞳はきらきらと輝いている。白い歯を光らせて笑みを浮かべ、「いいえ、初対面」と答えた。「わたしたちの時間はたっただけ始まったの」

「わたしたちの——時間？」ラリーはひよろ長い体を起こし、ゆっくりと背すじを伸ばした。この娘の晴れやかで有能そうな顔には、ラリーの頭を包むアルコールの霽^{もや}を貫き、警戒心を呼び覚ますなにかがあった。あまりに冷静沉着で、あまりに自信たっぷりな笑い。「どういう意味だ？」ラリーはつぶやくように言った。「なんの用？」

娘はコートを脱ぎ、まるくふくらんだ胸のカーブとしなやかなプロポーションをあらわにした。「マティーニをいただくわ。それはそうと——わたしの名前はアリスン・ホームズ」

「ラリー・ブルースターだ」ラリーは娘をじつと見つめながら、「なにをいただくって？」

「マティーニ。ドライで」アリスンは落ち着いた笑みを浮かべた。「あなたも一杯どう？」

ラリーは押し殺したうなり声を洩らし、ウェイターに合図した。「ドレイ・マティーニをひとつ頼むよ、マックス」

「かしこまりました、ミスター・ブルースター」

数分後、マックスがもどってきて、テーブルにマティーニのグラスを置いた。マックスが去ると、ラリーは金髪の娘のほうに身を乗り出した。「さて、ミス・ホームズ——」

「頼まなくていいの？」

「なにか飲みもの頼まなくていい」ラリーは娘がカクテルをすすめるのを見守った。小さくて華奢^{わかしよ}な手。見た目は悪くない。しかし、その瞳に浮かぶ自信に満ちた落ち着きが気に入らなかった。「時間が始まったっていうのはなんのこと？ ちゃんと説明してくれ」

「単純な話。ここにすわっているあなたを見て、あなたがその人だってわかったの。テーブルは散らかってるけど」散乱する空き瓶と紙マッチに向かって顔をしかめる。「かたづけてもらえばいいのに」

「このほうが好きなんだ。ぼくがその人だとわかったって？ その人って、なんの人？」興味が湧いてきた。「もっとくわしく」

「ラリー、いまはわたしの人生の中で、とてもだいたい瞬間なの」アリスンは周囲を見渡しながら、「こんな場所であなが見つかると、だれも予想してない。でも、わたしの場合はいつもそう。ずっと前——」